

数える場面が次のように描写されている。

「いそ今度は身付ました。この障は何目かしら、どれどれ」と指を折って「十一、二十、三十、四十」と勘定する様子は、数多いという伊予の湯折もすらすらと数えられそうである。

紫式部の娘の大式三位も女流歌人として有名であつた。「小倉百人一首」には彼女の次の歌が入っている。

有馬山猪名の笹原風吹けば
いでそよ人を忘れやはする

有馬山という山はないのだが、有馬温泉が有名だつた為温泉周辺の山が有馬山として歌枕になつたのである。なお余談ながら、女傑の有馬禰子さんの名前は平安朝の歌人の源兼昌は、有馬が海から遠いのにどうして塩湯が湧くのだからと、次のような歌を作つたつみはるけきものを如何にして
有馬の山に塩湯いづらん



明治12年に出された「温泉番付表」の「大関」を写し、西の大関を有馬として一覽表になっている。

現代の温泉寺では、食塩泉は本宮に海水が地中に閉じめられたと考えられている。食塩泉と二つが、大量の塩塩が出る二つすらある。

清少納言の「枕草子」の一つの奥本に当時の名湯を列挙した次の一節がある。

温泉は ななくりの湯 有馬の湯 那須の湯 つかまの湯 とも湯。

七栗の湯は伊勢にあり、現在の橿原温泉に相当する。おそらく伊勢参宮の折に寄ることが多いので知られていたりと思われる。東間の湯は筑摩の湯と同じで、信濃の國府の近く、現在の松本市の清間温泉と考えられる。

また平安時代後期には修験道が興隆して熊野詣が盛んとなり、その途中で湯峰温泉等に沐浴した。藤原忠志は日記「中右記」で湯峰の谷底には温泉と寒水が並んで湧いていることを記し、次のように書いている。

誠に稀有のことである。神験でなければどうしてこのようになことが有るか。この湯に浴する人は万病が除かれると聞いている。

五 鎌倉・室町時代人と温泉

鎌倉幕府の第三代将軍源実朝は「金槐和歌集」の歌人として名を残した。あまり鎌倉の外に出なかつた人だが、二所詣といつて箱根権現と伊豆山権現のある所である。おそらく信仰と保養を兼ね、熊野詣と似ていた。伊豆山は熱海に近く、嘗ては海に面した断崖から温泉が噴出すること有名であつた。彼の次の歌はいずれもそれを詠んだものである。

湯の伊豆津海の中に向ひていづる湯の伊豆さんだものである。

現代の温泉寺では、食塩泉は本宮に海水が地中に閉じめられたと考えられている。食塩泉と二つが、大量の塩塩が出る二つすらある。

清少納言の「枕草子」の一つの奥本に当時の名湯を列挙した次の一節がある。

温泉は ななくりの湯 有馬の湯 那須の湯 つかまの湯 とも湯。

七栗の湯は伊勢にあり、現在の橿原温泉に相当する。おそらく伊勢参宮の折に寄ることが多いので知られていたりと思われる。東間の湯は筑摩の湯と同じで、信濃の國府の近く、現在の松本市の清間温泉と考えられる。

また平安時代後期には修験道が興隆して熊野詣が盛んとなり、その途中で湯峰温泉等に沐浴した。藤原忠志は日記「中右記」で湯峰の谷底には温泉と寒水が並んで湧いていることを記し、次のように書いている。

誠に稀有のことである。神験でなければどうしてこのようになことが有るか。この湯に浴する人は万病が除かれると聞いている。

鎌倉幕府の第三代将軍源実朝は「金槐和歌集」の歌人として名を残した。あまり鎌倉の外に出なかつた人だが、二所詣といつて箱根権現と伊豆山権現のある所である。おそらく信仰と保養を兼ね、熊野詣と似ていた。伊豆山は熱海に近く、嘗ては海に面した断崖から温泉が噴出すること有名であつた。彼の次の歌はいずれもそれを詠んだものである。

湯の伊豆津海の中に向ひていづる湯の伊豆さんだものである。

豆のお山とうべもいひけり
ばなりけり
伊豆の国山の南にいでる湯のはやきは神の験なりけり

「はやき験」とはその湯の効験のあらたかなことを言っているのである。なお彼は熱海にも足を伸ばしたらしい。次の歌もある。

都より立つ已にあたり出湯有り
名は東路のあつ海といふ

次に実朝の和歌の先生であつた藤原定家について述べる。定家の日記「明月記」を見ると何回か有馬へ湯治(遊山を兼ねて)に行つたことがわかる。有馬温泉は平安時代の末に一度洪水で荒れ果てたが、鎌倉時代初めに大和国言野山の仁西上人が熊野権現の神託を受けてこれを復興し、薬師如来を圍繞する十二神將にたぞらえて十二の坊舎を建てたといわれる。二れがまた宿坊ともなつたのである。その他の宿屋も追々できたようである。「明月記」の建仁三(一二〇三)年七月七日には次のように記されている。

六月末から有馬の湯屋に来ている。今朝上人湯屋に移つた。ここは地形が最も幽邃で高山に対し、遠く川の流れるを望むことができる。七日間の湯治が終つたので今日から水湯を始める。

温泉浴の前後に淡水の沸かし湯に入る習慣があつた。また「明月記」の別の所では、定家の妻の西園寺家が一家をおいて(現在の大阪の)吹田の別荘へ行き、そこへ有馬の湯を取り寄せて浴びたと批判的な口吻で書いている。

また定家は晩年六十五歳の頃膝を病み、藤間田の湯(今の湯郷温泉)に行きたいけど行けないと次のように書いています。

膝には有馬の湯といえども走めし効験がないだろう。これは老いにより次第に衰えたものが、藤間田の湯